

立教大学学術推進特別重点資金（立教 S F R）
大学院生研究
2013年度研究成果報告書

研究科名	立教大学大学院 異文化コミュニケーション研究科 異文化コミュニケーション専攻		
研究代表者	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科・異文化コミュニケーション専攻・博士課程前期課程2年	瀧戸彩花	印
指導教員	所属・職名	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科・教授	野田研一	印
自然・人文・社会の別	自然 ・ <input type="checkbox"/> 人文 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 社会	個人・共同の別	<input type="checkbox"/> 個人 <input checked="" type="checkbox"/> ・ 共同 名
研究課題名	カバー音楽から見る現代の音楽アーティスト像の変容		
研究組織	在籍研究科・専攻・学年	氏名	
	異文化コミュニケーション研究科・異文化コミュニケーション専攻・博士課程前期課程2年	瀧戸彩花	
研究期間	2013 年度		
研究経費	(支出金額) 162 千円 / (採択金額) 195 千円		

研究の概要 (200~300字で記入、図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究では、1990年代後半から2000年代の「カバー音楽」に着眼して、アーティストがカバーという手法を多様するようになった理由と原因を明示し、アーティストや聴衆と楽曲の関係性を検証することで、アーティスト像の変容を解明する。カバー音楽とは何か、如いてはポピュラー音楽とは何かを探求する一端として本研究を行う。研究方法は、①カバー音楽と諸領域に関する文献調査②聴衆へのアンケート調査③アーティストへの半構造化インタビュー④原曲とカバー曲の楽曲分析を用いる。音楽と文化、サブカルチャー、社会学、文化人類学、コミュニケーション、メディア等の視点より考察することで、現代の音楽アーティストを取り巻く環境を検証する。

キーワード (研究内容をよく表しているものを3項目以内で記入。)

[ポピュラー音楽] [カバー音楽] [アーティスト像の変容]

研究成果の概要 (図・グラフ等は使用しないこと。)

本研究は、2010 年頃より行ってきた「ポピュラー音楽とは何か」という問いを明らかにするための研究の一環として行った。時代に応じて激変する現代の音楽環境において顕著であるカバー音楽を 2012 年より用い、人と人、人と音楽のコミュニケーションが如何に行われているのかを検証することで現代の音楽アーティスト像の変容を明示するために、本特別重点資金に採択された 2013 年 6 月初旬から 2014 年 4 月初旬まで資金を活用し、2013 年 9 月よりアンケート調査及びインタビュー調査を行った。

1. 研究目的と意義

古来、音楽は尊いものとして扱われ、人々と音楽はそれぞれ別の位置に属するものとされていた。しかし近年、音楽はメディアの発達により多様性を富み、現代には音が溢れ様々な音楽形態が出現した。ジャンルも複雑化している。そのような社会的現象から、音楽と人との関係性が変容しているのではないかと考えた。音楽種類の変化に伴いアーティストの形態も多様化し、アーティストと曲の関係が変容し始めているのではないかと推測する。本研究では、アーティスト像の変容、アーティストと聴衆の関係の変容を明示するために、カバー音楽の歴史を詳細に調査する。また、カバーに付随する新たなコミュニティ形成の現象や2000年以降のカバー音楽の在り方を調査することで、人(アーティストや音楽制作者または聴衆)と音楽(曲)の関係性を検証することが可能であると推測する。顕著な現象として挙げられるカバーであるが、未だに本ジャンル、それら事象に関して、学術的な整理がされていないことから研究の必要性は明確である。

2. 各調査方法と成果内容

本研究では、調査事項とそれに対する調査方法が多岐に渡ること、また字数制限により調査結果において主要な部分を記載することとする。

①カバー音楽と諸領域に関する文献調査

先行研究として、まずカバー音楽の定義について文献調査を行った。カバーの狭義の定義は、ある演奏者により録音された特定の曲において、別の演奏者による演奏または再録音であるとされる。カバー音楽は、本来、音楽マネージメント会社の戦略として存在した(烏賀陽, 2005)。多くは海外楽曲を日本のアーティストがカバーするという行為であった。洋楽カバーにおいて、翻訳後の歌詞の内容が全く異なるものも存在したという。しかし、現代のカバー現象においては、当てはまらないものが複数ある。過去のカバー音楽の形態は、従来のアーティスト(アイドル・歌手)とは違うアーティスト像の認識を作り出すきっかけになったと筆者は考えている。それは高橋(2011)によっても明らかである。

カバー音楽について調査していくうちに、カバーと似て非なる種類の認識、「ジャンル」というものが存在することが明らかとなった。本報告ではジャンルについての概念は省くが、カバーと類似するものとしては、リミックス、コピー、編曲、コラージュ、セルフカバー(リメイク)、カラオケ、替え歌、ヴァージョン、サンプリング、トリビュート、オマージュ、パロディ、アンサーソング他がある(木下, 2009; 増田, 2005; 落合, 2008 他)。これらについては、各ジャンルとカバーとの相違を明らかにすべく、比較分析を行った。ニコニコ動画、ボーカロイド、初音ミク等の所謂同人音楽では、新しいカバーの形態も出現している。従来は過去に流行した曲を20~40年(もしくはそれ以上)経ってからリメイクするという形であった(落合, 2008)。しかし、2010年代にはリメイクという行為は最短で半年から1年という速さで行われるようになり、同人系アレンジ音楽というカバーのジャンルが顕著になっていくことが井手口(2012)によっても明らかである。筆者の調査では、ラジオ番組を持っているアーティストやライブでの活動を主とするアーティストの場合は、カバーを多用する傾向にあることが明らかとなり、現代のアーティストは、楽曲制作をファンからの要望で行うことにより、支持を得るという試みを行っていることが分かる。円堂(2013)が述べているように、遊びの一環としてカバーを行っているという説もある。以上を踏まえ、カバーという行為は、商業的目的における戦略の一部であると同時に、商業的な目的に捉われずに自らの趣向を織り交ぜた楽曲制作を可能にする一種の方法として存在していると考えられる。

②聴衆へのアンケート調査

アンケート調査において、「聴衆」は全て音楽活動・楽器活動の経験者とする。また、音楽をよく聴く・好んで聴く、演奏する(過去に行ったことがある)ものを対象としている。楽曲の聴き比べには、「丸の内サディスティック」、「traveling」、「少女時代」を用いた。

iPod等の音楽再生機器や音楽動画再生サイトで音楽を聴取する頻度が高いものは比較的カバー音楽にも馴染みがあると分かる。普段どのような場所で演奏するかにおいては、スタジオが最も割合を高く占め、続いて家、ライブハウス、部室、公共のホールとなった。カバー曲をどこでよく聴くか、という問いに対しては、Youtube、ニコニコ動画が圧倒的割合を占め、カバー曲を多くの人に披露する機会が増えたこと、つまり提供する場がメディアの発達によってもたらされたことが大きな要因であると推測される。2番目に多かったのは、ライブハウスであり、①の文献調査でも明示されているように、アーティストのライブ活動とカバーは密接な関係にあると考えられる。カバーに対するイメージでは

研究成果の概要 つづき

、「リスペクト」「アレンジ」「コピー」「楽曲制作の手段」「インスパイア」「再流行」「パフォーマンス(ライブ時における)」「再演奏」「楽しい」「面白い」他と、アーティストを尊敬してのカバーというイメージが大きい。また、カバーに対して、全体的にマイナスなイメージは少ないようである。類似する音楽については、「リメイク」「トリビュート曲」「アレンジ音楽」「リバイバル」「コピー音楽」「リミックス」「パロディ」「替え歌」「オマージュ」「二次創作」「同人音楽」が多く挙げられた。カバーとコピーについては、どちらかというと同じではないと答えた人が74.73%を占めたが、どちらかというと同じであるという意見もある。しかしながら、両者とも「カバー」は原曲にオリジナリティがあるもの、曲の構成、メロディ、コード等がある程度アレンジしているもの、「コピー」は本物に如何に似せるか、再現しているか等を基準として認識しているということが明らかとなった。

③アーティストへの半構造化インタビュー

ここでのアーティストとは、プロやアマの明確な区分基準を設けてはいないが、今回はアンケート調査によって得られた回答を参考とし、生計をその職業のみで行っているものをプロとし、それではないもののプロのアーティストを目指しているものをセミプロとした。プロ~セミプロ、セミアマ~アマと大分する。また、実際にインタビューでもプロアマ区分に関する質問を行った。成果報告において、計4人に掲載の同意を得ており、本報告書では上記の同意を得られた部分を報告する。基本情報:プロ~セミプロ2名、アマ~セミアマ2名、平均24歳、職業:大学生2名、制作者1名、フリー1名、インタビュー調査期間:10月上旬~3月下旬、所要時間:1h~2.5h

質問内容:「プロとアマの違いとは」「近年のカバーブームに対して感じること」「カバーすることに対する考え(好ましく思うか)」「カバーとコピーの違いはあるか」「カバーとコピーをしたことがあるか」他

得られた内容としては、ほぼアンケート調査と変わらない結果となった。特に専門的な意見としては、『過去にあったものと、同じもの』(たとえば同じデータ、同じ機能、同じ外見...)のものは商品価値がない(もしくは低い)。実質は同じものだったとしても、新しさを演出して再発表する努力があれば、そこには価値が生まれる。コピーとは、この努力なしに(もしくは低レベルの努力で)世に出た音楽を指す言葉だと思う。例えばニコニコ動画の「演奏してみた」でも、その動画の趣向が新しかったり、演奏が素晴らしければ価値が生まれ、より「カバー」的に見えて行くと思う』といった意見であり、他のインタビューイも同様の意見であることから、カバーにおいてアーティストへの認識は1990年以前と変容してきていると考えられる。

④原曲とカバー曲の楽曲分析

原曲とカバー曲の組み合わせは以下に分けることが可能である。①原曲とカバー曲ではメロディーラインも調も一緒だが楽器隊の編成が異なる②メロディーラインが変化するが、楽器隊の編成は変わらない③メロディーラインも楽器隊の編成も変わらない④メロディーラインも楽器隊の編成も異なる⑤全く異なる楽曲に変容するもの(ラップ調、声なし等)である。楽曲は何らかの音楽的ファクターによって、原曲との参照関係を保っている。実際にはその楽曲の認識がほぼメロディーやアーティスト自身の声によって把握されていることが多く、動画やライブ上での感想には、聴覚的な要素よりも視覚的な要素、つまりボディランゲージ等の身体動作やライブパフォーマンスにおけるアクション、PV映像における視覚効果、また、ごく少数ではあるが、服装や髪型に着目するものもいるようである。これらの事象は、音楽的コミュニケーションのモデリングにより解析が可能である(ハーグリーブズ、マクドナルド&ミール、2013)。以上の分析には、増田(2006)、Magnus, Magnus & Uidhir(2013)、オタニ(2001)他を参照した。

3. 得られた成果と今後の展望

本研究では、カバー音楽によって人と音楽の距離が接近し、音楽形態の多様性だけでなく、新たな人と音楽のコミュニケーションが生み出されているということが分かった。今後は、作品、制作者、聴衆等の要素をより細分化し、音楽的コミュニケーションのモデルをより明確にし理論化していく。

参考文献

- 円堂都司昭(2013).『ソーシャル化する音楽:「聴取」から「遊び」へ』青土社.
 ハーグリーブズ, DJ・マクドナルド, R., & ミール, D. (編) (2005).『音楽的コミュニケーション:心理・教育・文化・脳と臨床からのアプローチ』(星野悦子・片平建史・宮澤志穂・牟田季純・川上愛・羽藤律・田部井賢一ほか・訳). 誠信書房. [原著:Hargreaves, D.J., & MacDonald, R., & Dorothy, M. (2005). *Musical Communication*. USA: Oxford University Press].
 井手口彰典(2012).『同人音楽とその周辺:新世紀の振源をめぐる技術・制度・概念』青弓社.
 木下大輔(2009).「[09]音楽を演奏する❖編曲 arrangement, transcription」久保田慶一(編)『キーワード150音楽通論』(pp. 183-185). アルテスパブリッシング.
 Magnus, C., & Magnus, P. D., & Uidhir, C. Mag. (2013). Judging Covers: *The Journal of Aesthetics and Art Criticism*, 71, 361-370.
 増田聡(2005).『聴衆をつくる:音楽批評の解体文法』青弓社.
 増田聡(2006).『その音楽の(作者)とは誰か:リミックス・産業・著作権』みすず書房.
 落合真司(2008).『音楽業界で起きていること』青弓社.
 オタニユキノリ(2001).『J-POP「リバック!」白書-歌ってみたらアラ不思議??』徳間書店.
 高橋信之(編)(2011).『ボーカロイド現象:新世紀コンテンツ産業の未来モデル』スタジオ・ハー
 ドデラックス.
 烏賀陽弘道(2005).『Jポップとは何か:巨大化する音楽産業』岩波書店.

※この(様式2)に記入の成果の公表を見合わせる必要がある場合は、その理由及び差し控え期間等を記入した調書(A4縦型横書き1枚・自由様式)を添付すること。

研究発表 (研究によって得られた研究経過・成果を発表した①～④について、該当するものを記入してください。該当するものが多い場合は主要なものを抜粋してください。)

- ①雑誌論文 (著者名、論文標題、雑誌名、巻号、発行年、ページ)
- ②図書 (著者名、出版社、書名、発行年、総ページ数)
- ③シンポジウム・公開講演会等の開催 (会名、開催日、開催場所)
- ④その他 (学会発表、研究報告書の印刷等)

① [雑誌論文]

〈投稿を予定している学術雑誌〉

RICS 異文化コミュニケーション学会『異文化コミュニケーション論集』立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科 (2015) 書評を予定

④ [学会発表]

〈発表を行った学会〉

日本ポピュラー音楽学会 (JASPM) 第25回年次大会 12月8日、個人発表

立教大学 RECF 研究会 2013年12月、個人発表

〈発表が決定している学会〉

RICS 異文化コミュニケーション学会 2014年5月31日、口頭発表

日本ポピュラー音楽学会 (JASPM) 2014年度関東地区例会 (日付未定)、口頭発表

[研究報告書]

日本ポピュラー音楽学会 (JASPM) 第25回年次大会 12月、大会論集

RISC 異文化コミュニケーション学会 2013年6月、大会論集

〈ニューズレター投稿掲載〉

日本ポピュラー音楽学会 (JASPM) 第25回年次大会 1月20日、研究報告書投稿、3月号掲載